

	なか 中	むら 村	かおる 薫 (愛知県)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第37号		
学位授与の日付	平成11年4月20日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	華嚴浄土思想の研究		
論文審査委員	(主査)	文学博士 教授	鍵主良敬
	(副査)	文学博士 教授	小川一乗
	(副査)	文学博士 教授	小野蓮明
	(副査)	文学博士 教授	安富信哉

学位請求論文審査要旨

[論文の性格]

本論文は、『大方広仏華嚴經』(以下『華嚴經』)に対してほぼ一五〇〇年になんなんとする年月をかけて、中国(日本)において研鑽されてきた伝統的な華嚴教学の立場に立つ論考である。したがってインド・チベット及び近年の欧米等の研究業績に視野を広げ、その思想・文献などを見る研究方法は次の課題として残されている。

その場合、華嚴教学といっても、多様な論点が考えられるが、特に浄土思想との関係におけるそれを論じようとする。

その論考は大きく次の三篇に分けられる。

第一篇 『華嚴經』の浄土義

第二篇 中国仏教における華嚴浄土義

第三篇 親鸞の『華嚴經』観

[論文内容の要約]

第一篇「『華嚴經』の浄土義」は、四章に分けて論じられている。『華嚴

『経』における浄土思想をどのような観点から見るかということとは十分に吟味されなければならないが、筆者にとっては親鸞によって確立された「浄土」「真宗」としての独自の教学内容への関心が高いために、そこで重要な論点として究明が続けられている多くの課題のなかから、特に「信」「誓願」「成仏」「善知識」の四点にしぼる。それらの課題は華嚴教学のなかではどのような教理的思索が重ねられているか、いかなる内容のものとして捉えられているか、その点を論じようとするのである。

この篇を構成する各論の内容はそれぞれに重要な示唆を含むものではあるが、そのなかでも特に注目を引くのは、第一章『華嚴経』における信の位置で考察されている「十種甚深」の問題である。なかでも「縁起甚深」は仏教学の基本的にしてかつ根源的課題といえる「縁起」の問題が、特に『華嚴経』の「明難品」においてどのように深められているかを考察する。「明難品」は難解であることを表題として、それを明らかにしようとする項目である。筆者はその主題のもとで、しかも根源的智慧を象徴的に現わしていると考えられる文殊菩薩との対話の形式において、大乘仏教の精髓といってもいい視点を掘り下げてみようとする。どのような思想内容として把握できるかを目指しながらの究明を進めようとするのである。深遠であることを標榜する「甚深」の語は、「縁起」であることが直ちに「法」であるという根本仏教以来の問いかけが、大乘仏教として展開する場合にもより深まることを示している。それ故、縁起観の基本を決して失うことなしに、見事にその内容を肉づけている「明難品」の提起する問いかけについて、筆者はそれに対する賢首法蔵の『探玄記』の解釈を採用して、その実相に迫ろうとするのである。

以上のような観点は十種の論点のそれぞれに見られる。とりわけ「業果甚深」におけるそれや「一乗甚深」における問題意識と相いまって、大乘仏教の原点とでもいうべき重要な内容を持つことを踏まえながら、特にそれが信の会座において「信中の解」として問題になることに注意する。『華嚴経』における信の課題は、菩薩の実践的歩みとの関係において問われるが、それは「勝解」といわれるような優れた理解力に裏づけられた智慧の信である。まさに智慧を象徴する文殊菩薩によって目指されなければならない、深い洞察力に関係することを論じようとするのである。

第二章の「菩薩の誓願」を論ずる箇所では、「十地品」初歡喜地における

十大願と、「入法界品」「普賢行願品」における普賢菩薩の十大願を通して、『華嚴經』を素材とする場合の「願」の問題が考察される。「信は願より生ず」という視点のもとで、信の根底をなしている願の本質を問おうとするのである。

誓願を弥陀一仏の本願として捉えるところに浄土教の立場がある。それに対して、一般的にみれば諸仏の願としていろいろな種類の願が想定される。「諸仏を供養」する願も有力な意味をもつ。そこに『華嚴經』の立場があるとするところから、この論考は始められている。

その場合、弥陀の本願は因位法蔵菩薩の誓願でもあるという視点に即応させてみると、『華嚴經』においては、菩薩の願といっても普賢菩薩の行願として示されている願が、重要な問題をはらんでいるというのである。普賢の行願とは何を意味するかということは、大変深い問題を示唆している。このことはよく知られている。しかし、その具体的内容ということになれば、十大願として知られるそれによって内容づけるしかないともいえる。故にその視点から問題解明の糸口を見出そうとするのである。

また「十地品」初歡喜地の菩薩の十大願も興味深い問題を提起している。そこで、凡夫地を離れて如来の家に生まれることのできた菩薩の歡喜を、その内実として生み出されてくる願における独自の性格として解明しようとする。凡夫を越えた菩薩の願がその主題となるために、凡夫としての衆生の単なる期待とか希望のことではないというのは重要な視点になる。

第三章「『華嚴經』の成仏義」は、三生成仏の説を生み出すもとになっている普莊嚴・地獄・善財三童子のもつ意味について考える。特に「盧舎那仏品」に登場する普莊嚴童子が、現身のままで見聞位(生)・解行位を成じ、十信の満位に成仏する証入位に至る。その意味を、次の二童子の三生即一生といわれる視点と関係させながら考察する。最後に「信満成仏」の項を立てるのは必然的な展開になる。

十信の満位は凡夫位であって次の初住位から菩薩道が始まる。にもかかわらず、凡位の最後で成仏するという考え方は、どのような教理的内容から生まれてくるのか。「因果同時」「初發心時便成正覺」等の主張と関連して述べられる一乗円教の観点に立つからである。最初の第一歩に最終の成仏を確信する立場を明らかにすることによって、「浄土他力義」の視点に即応するものとして、華嚴の教理を統括するのである。

第四章「『華嚴経』の善知識観」では、親鸞の善知識観を念頭に置きながら、五十三人の善知識のなかでも特に文殊・普賢・弥勒の三菩薩と善財童子との出遇いの意味について論及している。その場合、文殊は下化衆生を含んだうえでどこまでも菩提を求める求道心を発揚させる。それに触発されて善財童子は菩提心を成り立たせるが、それは自己内面の闇に対する自覚による。それに対して普賢は、供養諸仏を含んだうえでの開化衆生の普賢心とその行を現わしている。その当体は大悲の願行となるために、浄土教における還相回向の課題と深くかかわる点が示唆される。また弥勒は求道の最後に文殊に帰ることを教える。つまり未来仏である弥勒が、結局は大乗の智慧への還帰によって成立する無限の自覚道を示していることになり、そこから湧き上がってくる菩提心こそが、無形の文殊による無辺広大な普賢行への歩みとなるとの結論に達するのである。賢首法蔵の「有形の文殊を開覚の初縁と作して、無相の妙徳を終歸の妙趣と為す」との語をもってこの項を結ぶところからは、筆者の狙いとするところを十分に推定できる。

第二篇「中国仏教における華嚴浄土義」は四章から成り、その第一章「中国華嚴列祖の浄土義」においては、杜順・智儼・法蔵・澄観等の浄土義が概観される。とりわけ智儼の『孔目章』における十種の浄土と往生の意義・所信の境・因縁等の検討が行われる。その結論は要するに「自性弥陀」「唯心浄土」の立場に立つもので、浄土も弥陀も我々の心の内面のことと捉え、心の外に浄土はないとする理的概念化がなされていると見る。いわゆる抽象的観念論に陥落する欠陥を露呈するものだ、というのである。

第二章「祿宏の華嚴浄土義」では明代の雲棲寺の祿宏(1535-1615)が禅と念仏の融和をはかり、いわゆる雲棲寺念仏を樹立して一世を風靡したところに注目し、その浄土義にメスを入れる。その主著『阿弥陀経疏鈔』を見れば明らかなように、浄土三部経のうちでも『阿弥陀経』を中心にした念仏の鼓吹であり、とりわけ「執持名号」による往生に重点を置く立場とする。それと対応しながら彼の教学の基礎になっている華嚴思想を見ると、それは実践的関心に強く裏づけられているという。

したがって、『華嚴経』を全体とし、『阿弥陀経』を部分として、一即一切・一切即一の論理を駆使して、毘盧舍那仏と阿弥陀仏の統一をはかって、頓悟のための漸修として「弥陀の願力にすぎる」という発想に陥らざるをえ

ないので、それでは浄土教の本質から逸脱してしまうと批判する。すなわち
 株宏は浄土教を尊びながら華嚴を重んずるといふ融会の立場であり、儒教に
 おける人倫道徳をも重視するので、その点では、親鸞における浄土教の根源
 の立場とはあまりにも違いすぎるとの結論に達する。

第三章「彭際清の『華嚴念仏三昧論』」では清代の居士仏教の代表者とも
 いえる彭紹弁(1740-1796)における華嚴思想と浄土理解との関係を論ずる。
 まず、前章で考察した株宏の教えとの出遇いを通して、「忽然として西方浄
 土に帰し、南無阿弥陀仏の六字を以て日常生活の規範とする」。その彭際清
 の浄土義は、聖道の諸宗と対立する相対的な浄土教ではなく、仏教そのもの
 が浄土教であると見ながら、禅浄融合の浄土教という極めて屈折した内容も
 つつことを明らかにする。つまり『浄土三経』→『華嚴経』『入法界品』中
 の念仏三昧→華嚴浄土教という変遷をたどることによって、『華嚴経』を正
 依の經典としながら念仏の一法を立て、その念仏をもって全仏教の統合を試
 みたというのである。換言すれば『華嚴経』はあくまでも聖道自力を説いた
 經典であるという見方から脱却できなかったために、法然、親鸞のいう外典
 までも含めて大乘の至極を明らかにする手がかりになると見る観点は、及び
 もつかないものになっていたということになる。

第四章「楊仁山の日本浄土教批判」は、清末の居士仏教の代表者である楊
 文会(1837-1911)の浄土真宗批判をとりあげる。『選択本願念仏集』を批判
 した『評選択集』は『大乘起信論』等を拠り処として馬鳴宗を建立し、釈尊
 の教法を新しい教判によって総括して、これまでの過失や偏見を正そうとし
 た楊仁山が、日本に広まっている浄土真宗によって本来の仏教が衰退したと
 考えて、その元凶を徹底的に批判したという構図ができあがる。

主な論点を例示すれば『評選択集』教相章に「聖道を捨てて正しく浄土に帰
 す」とある「捨」については、龍樹も道綽も説いていない。したがって勝手
 にこのような教判を立てるのは病的としかいいようがない。聖道と浄土とは
 一にして二、二にして一の関係であって、浄土教のみにその存在意義を認め
 ようとする態度は、到底容認できないという批判である。

次に「二行章」の衆生と仏との身口意三業における関係は、衆生が仏を憶
 念すれば、仏もまた衆生を憶念するという三業不捨離の親縁関係であるとい
 う主張に対して、彼はそれは単なる衆生の側の推測にすぎなく、根拠のない
 希求に墮するものだとして、如来と衆生が同一内容を構成する真如と等同な

どということは、成立しえないと批判する。

これらの批判を連ねて結局明恵と同じく『選択集』は仏教において最も重要な菩提心を否定しているとし、菩提心なくして何をもって仏となりうるのか、菩提心こそ正覚心なのに、それを軽んじて念仏を重んずるのは本末転倒であって仏教の本義に反し、単なる凡夫の思い込みに陥るだけだという。そして楊仁山は「純他力教は、一家の私言なり。仏教の公言にあらず」との結論に達している。

それに対して筆者は、親鸞のいう他力は自力を否定した他力ではなく、自力無効の自覚によって他力を仰ぐしかなくなる他力であって、自と他を分別するものではない。自力と思っていることも実際には如来より賜った他力回向の働きのことだと反論する。楊仁山のいう批判は常識的な観点としてみれば当然のように思われる。したがって浄土真宗の真意を汲み取ることの困難さをも含めて、真の大乗仏教を明らかにするための努力は、このような批判に対して虚心に応答していくところから生まれるといえよう。その可能性を読み取ろうとする論考だと思われる。

第三篇「親鸞の『華嚴経』観」は、第一章が同名の章立てになっているので、この篇全体を統括する形になっている。その主題は本願の念仏であり、特に「名号」とされる面に注目して第一節を「名号について」とする。ここでは親鸞の名号釈を踏まえううえで、『華嚴経』における「如来光明覚品」を通して華嚴学でいう名号観の検討に入る。すなわち親鸞が「名」と「号」を因と果とに分けて領解するのに対して、法蔵は「如来即名号」としながら「名」は「釈迦等の別名」、「号」は「諸仏の通名」、また「名」は「体」、「号」は「徳」を表わすとするところに、両者の異なりを見る。いわば「尽十方無碍光如来」と名のって衆生済度の誓願を成就しようとする命のはたらきとしてみる如来の名号観と、すぐれた特質の捉え方といえる洗練された教理学の対応である。いずれにしても名号は光明を内容として衆生に真実の智慧を気づかせようとするのであるが、両者の観点は特殊と普遍というような異なりをもつと結論する。

第二節「本願念仏の伝承」は親鸞が法然との出遇いを通して確信した阿弥陀の本願の真实性とその歴史的展開といえる三国七祖の伝承の確かめである。この節を踏まえて第三節は「真宗七高僧の華嚴浄土義」となる。したがって

第三節で考察されているのは、龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空の七祖を親鸞がどのように見ていたかを『正信偈』によって要略し、七祖の著作にみられる『華嚴経』に関係している部分を抽出して、それが「浄土義」といえる側面を概説したものである。

その基本は『大無量寿経』のなかに述べられている「普賢大士の徳」「仏華嚴三昧」などにより、『華嚴経』が浄土教義の中核にかかわっているためだとし、「浄土の真実を宗とする」という意味の浄土真宗の立場から見れば、方便仮門としての大小権実の教えは、『華嚴経』「入法界品」に登場する様々な善知識の教えに相当して、それぞれの位置づけを可能にするというのである。

第二章「『教行信証』と『華嚴経』」は、第三篇の中心であり、筆者がもっとも力を入れて究明しようとする課題である。すなわち、『教行信証』のなかに引用されている『華嚴経』の内容はもとより、その引用の仕方などから、どのような親鸞の経典を見る眼が浮かび上がってくるかという問題意識のもとで、『教行信証』以外の著作にまで視野を広げて考察を進めたものである。

その場合、仏陀の最期の教えとされる『涅槃経』が、最初とされる『華嚴経』と連引される箇所が三度あり、しかも『涅槃経』が先で『華嚴経』が後であるため、なぜ逆になるのか、その意図をめぐって古くから論議が重ねられている。筆者はその先人達の推定するところを踏まえながら、より一歩進めて親鸞の目の深さに迫ろうと試みる。『華嚴経』を一般的な大乘経典と見る常識的見解に反して「浄土三部経」に匹敵する「浄土教的精神を含んでいる」経典、いわば浄土経典として見たと結論づけようとするのである。換言すれば、“『大無量寿経』の如来の本願を軸に、往相の証果を踏わす『涅槃経』と還相の普賢行を踏わす『華嚴経』が車の両輪として、浄土真宗を顕かにしている。”(1032頁)ということである。

第三章「明恵の『華嚴経』観」は、親鸞と同年に生まれた明恵(1173-1232)の多くの著作のなかで『華嚴信種義』といわれる書物を探りあげ、鎌倉期の華嚴教学における「信」の内容を確かめたものである。明恵が法然を批判することになるその前提としての聖道の信の理解の特長を明らかにしたものとイえる。

[審査結果の要旨]

中国・日本に伝承された大乘仏教のなかで一方の雄とされる華嚴教学が、所依の經典とする『華嚴經』は多岐にわたる問題を提起している。そのなかで筆者が特に論及に務めた浄土思想との関係については、これまで部分的な考察は多少見られたものの、総合的な観点を意図したものはなかった。あえてその困難な課題に取り組んだ努力は多とされる。

また中国仏教という独自の教学体系をもつ思想的展開において、華嚴学派に属する学匠達が、どのような視点をもって浄土に関する課題を理解し受容していったか。いわゆる、儒・仏・道三教の相克と調和を通しながらどのような方向をたどるのか。結局その限定に飲み込まれて独自の展開は為しえなかったという結論になるとしても、その跡づけを確かめる必要は欠かせない。したがって唐代以後の華嚴学派の論師達の幾人かに焦点を当てて、そこに浮かび上がってくる禅と浄土の融合や、広く教理と実践の相即の課題をも加味しながら、彼等が理解していた浄土思想の性格を明らかにした点は、これまで等閑視されていた部分に光を当てたものとして評価できるものである。

また、論考を進めるについて、これまでに公表されている多くの論文や関連する資料が網羅的に参照されていて、審査員も気づけなかった文献まで提示されていた。その努力の認められるところである。

ただし真宗七高僧の伝統を踏まえながら親鸞における『華嚴經』の理解を重点的に論ずるについては、その普遍的根源的視点を捉える点で弱さが見られた。『華嚴經』のどの部分が大乗の至極にかなうものとして受容され、そのために手がかりになるものとして他の部分がそれなりの意味をもって位置づけられるのか。「念仏三昧」「本願」「浄土」「三界唯心」等の課題に特に注意を向けながらも、その視点の深まりに不十分さがみられたのは惜まれる。

『華嚴經』を聖道自力を内容とする經典として捉え、その中に他力の面を読み取ろうとするのでは無理がある。浄土教に他力の仏道としての側面があるのは当然のこととしても、それは単なる救済教としてではない。浄土を指方立相的に見るといっても、それを対象的実体的に見ることでないことは、筆者も先刻承知のことである。しかるに、その論述の過程において対象的に見ているかのような印象を与えられるのは、親鸞の立つところに対する理解が消化し尽くされていないからではないかと疑われる余地を残した。

華嚴学派の学匠達は、親鸞の浄土真宗によって明らかにされた自覚道を内

容とする浄土観を理解できていなかったといえる。そのために禅との融合や三教の一致という面においてしか仏教を見ることができず、その大乘の至極としての究竟的能動的意味を理解しえなかったのである。浄土真宗を単なる他界思想を依り処とする通俗的浄土観によるものとして批判するのはそのためである。その点の強調が筆者によって十分になされていたならば、該当する所論もより充実したものとなったと思われる。親鸞は単なる他力的浄土観を突き抜けて大乘経典を読んでいる。故にさまざまな経論を駆使しながらも表面的にそれを利用するというのではなく、その裏面に隠されている部分にまで目を向けている。そこでは超越的といってもいい視点によって、根源のところまで課題の本質を見ぬく目を深めているのである。

ところが群萌のための、念仏による真実の仏道の開顕という積極的意味が、筆者によって用いられた「浄土他力義」「半自力半他力」等の語によって薄められる危険にさらされたのである。親鸞の浄土理解を対象化し、通俗的なところへ陥める危惧が感じ取られたといつてよい。それは往生浄土の仏道のもつ主体的な意味を、自己自身のうえに自証するという視点の曖昧化である。そのため、単に如来の救済に預かったというだけでなく、救済を自証する立場でその自覚的深みに到達したところで、大乘の諸経論を読み込んでいかなければならないのに、その積極的な姿勢が明確に打ち出されなくなっているように思われる。この点は筆者にとって心外とされる場所かもしれないが、あえてこの際、指摘しておきたい。

なお、資料の語るところを掘り下げなければならない点で、もの足りないところが時にみられた。また引用された原典の掲げ方やその読み方に多少の不備があった。

以上のような再考を要する課題を含みながらも、それらは今後の筆者の努力によって十分補われるものと思われる。以上の如く審査した結果、この論文は文学博士の学位授与に値するものとして判定する。

[最終試験及び語学試験の結果]

この論文の内容及びそれに関連する事項についての口頭試問、及び外国語学力確認の結果、筆者は学位規程の定めるところに必要な学力を有するものと認められた。